

草庵仏教

第128号
(発行日)
2001年2月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638126 西宮市
小松北町1-2-3
電話・FAX(0798)
41-5346
(発行人) 土井紀明
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
22日午後2時
.....
- * 聖典講座 (浜屋西宮店)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会 (念佛寺)
第3土曜日午後3時

善因楽果・悪因苦果

J「このところずっと病気で外出もままならない状態です。お医者さんについて診てもらってもなおらないので、ある宗教のA先生に相談しましたら、(病気が)

なったのはあなたの過去の行いが悪かったからです。だから

自分の誤りを反省し、悪を離れるようにしなさい。そうすれば

病気もよくなつてきます」と言われました」

D「A先生が(あなたの病気はあなたの過去の悪業が原因で引き起こされた。だからあなたは

自分の生活態度を改めなさい。そうすれば病気も治るでしょう)

といわれたのは、善因楽果・悪因苦果という因果の説から言われたのだと思います」

J「善因楽果・悪因苦果の説とはどういう意味ですか」

D「善い行い(因)は安楽な結果を生み、悪い行い(因)は苦なる結果を生むということです。ただこの教えは注意をして受け取らねばなりません」

J「どういう点に注意するのですか」

D「A先生がもし、仏教の教えにもとづいて指導されたとするなら、そういう善因楽果・悪因

苦果の説明は、仏教としては正確な解釈ではないと思います」

J「なぜでしょうか」

D「そこにある問題は、善因悪因の結果(果報)としての、(苦と楽)をどう理解するかという点です」

J「私の場合は病気を(苦)と受け取りましたか」

D「善因楽果・悪因苦果の苦楽を、自己の内面的なものではなく外部状況つまり周りの環境や

社会状況それに身体の状態などと受け取ると、善因楽果・悪因

苦果の教説は誤解を生じてきません」

J「それはどういうことですか」

D「たとえばあなたの場合、今の苦しい病気は自分の過去の行いが悪かったからだということですが、はたしてそうでしょうか。

自分の過去の倫理的な行いや心の持ち方という因と、現在の病気という果が必然的に結びついて

いるのでしょうか。もちろん関係はありましよう。たとえば毎日腹立たしくイライラしながら

生活していると、胃腸が悪くなるということはよく知られています。特に心因性の病気は

心の状態と関係が深いですね」

J「病は気からとよくいいますね」

D「ええ。身体的な病いと内面の状態が関係していることは確か

かでしょう。しかし、病気の原

因が自分の心や行いの善し悪しから来ているという言い方は、偏った見方だと思えます。伝染して起こる病気もあり、偶発的な交通事故にあう場合もあり、遺伝的な体質から病気になることもあり、老化からくる場合もあります」

J「そうですね。貧乏はどうでしょう」

D「経済的困窮にしても、必ずしもその人個人の生き方が悪かったから経済的に困窮するとは

かりは言えないでしょう。世界を含めた社会の経済状況が個人の

経済状態と密接につながっていますし、また自分が病気や交

通事故にあつたり、取引会社の倒産のとばっちりをうけたり、

自然災害にあつたりして貧窮する場合も多いのですから、個人の

行いの善悪や心のあり方に貧乏の主要な原因を考えるのは、

偏った見方です」

J「では善因楽果・悪因苦果をどう受けとれば良いのでしょうか」

D「伝統的な解釈では善因・悪因とは、未来に結果をもたらす原因としての行いの善し悪しという

ことですね」

J「では楽果とか苦果とはどういう意味ですか」

D「過去の善悪の行為によって、安楽を感じたり(楽果)苦しみを

感じたり(苦果)するということですね」

J「楽を感じたり、苦を感じたりすると言うことはどういうことですか」

D「先ほど申しました、外部状況つまり周りの環境や社会状況

それに身体の状態などに対して、(どう感じるか)という、そこに

に安らぎ(楽果)を感じたり苦悩(苦果)したりすることなので

すね。そういう感じ方はそれぞれの人の過去の生き様の善し

悪しによって生じてくるといわれています」

J「もう少し具体的に話してください」

D「例えばどれほど裕福な境遇にいても、自分の人生に有り難

さや尊さを感じず、やりきれなさや寂しさや物足りなさを感じ

ることはいくらでもあります。また経済的には貧しくても人生

に安らぎや喜びや有り難さを感じて生きることが出来ます。病

気についても同じです。現在の病気にたいして(どう感じるか)

はその人の過去の業(行為)の結果であるということです。

すなわちいろいろな生活環境の中にあつて、どう感じ、どの

ように内面的に経験しながら生きるかということが、苦楽の果

報ということなのです。いわばそれ



耳扶
(C)SHOGAKUKAN INC.

ぞれの〈感じ方・経験の仕方〉に苦樂の果報が現れるのです。

それまでの過去の行いの善し悪し、生活態度の善し悪しが原因となつて、(感受の仕方)が違つてくると、このように言われています。

Q 「そういう感じ方のことを仏教では(業感)とっています」
J 「なるほど」

D 「ただ私は、苦樂の因を過去だけに見るのではなくて現在のの上に見ることがな重要だと思つています」

J 「現在の上で、善悪・苦樂の因果を考えるとというのはどういふことですか」

D 「自己の現在の問題にたいする自己の受け取り方の上での善悪として、善因樂果・悪因苦果を理解するのです。

人生上のいろいろな現在の問題、たとえば病氣や孤独や貧しさや人間関係などの問題に対して(今の状況を、どう受け取り、どう理解し、どう意味づけているのか)と問い直すのです。一言でいえば、身体を含めてあらゆる環境状況を(私はどのようになにか)と受けとめ、かかわっているか)という主体の問題として見るのです。その受けとめ方の善悪を問題にするのです。善き受けとめ方は安樂をもたらすし、悪しき受けとめ方は苦をもたらすということです。それが現在の上に善因樂果・悪因苦果

を見ることなのです」

J 「私の上で起こってくる出来事に対する私の受け取り方、経験の仕方、かかわり方の善し悪しが現在の苦樂の因になるといわれるのですね」

D 「ええそうです。総じて言えば現在の自分の状況にどう私がかかわっているか、そのかかわり方の善悪において善因樂果・悪因苦果の道理を見るのです」

J 「難しいですね。たとえば病氣の問題ですと、現在の私の病氣をどう受けとめるか、そのことを問題にするわけですね」

D 「ええそうです。例えば(な)で私だけこんな不幸な目にあわねばならないのか)とか、(運命が悪かったのだから仕方がない)とか、(神仏の罰・先祖のタタリ)だとか、(弱い私を生んだ両親が悪い)などのように自分をますます苦しめるような受けとめ方は、現在における悪因といえるのではないのでしょうか」

J 「ではどういふのが善因となつて、まことの樂果を生むような(受けとめ、理解、意味づけ)なのでしょいか」

D 「浄土真宗の教えから考えてみましょう。少し身近な表現で申しますと、昔から(お念仏によつて極樂まいるをする)と言

います。たいへん素朴な表現ですが、ここに端的に示されています。極樂は文字通り究極の安樂、安らかさの極まった境界の

ことなのです。その極樂に至らしめる善因、それがお念仏であり、お念仏という善因をいただくこととまことの安樂(極樂)が実現していくと教えられています。実際苦しみが除かれていくことは教えの通りです。お念仏をいただけば、今の時点から苦惱が軽減されていくのです。

ただ完全円満に安樂が実現するのはこの世のいのちが終わります。浄土に生まれてからと言われている。『もし三塗・勤苦の処にありてこの光明を見たてまつれば、みな休息することを得て、また苦惱なけん。壽終わりて後、みな解脱を蒙る』

と仰せられています。この世では心に休息が与えられ苦しみが除かれていき、この世のいのちが終わつて浄土に生まれると、完全に迷いの苦から解放されると仏陀は仰せられています」

J 「善因樂果の善因は真宗ではお念仏のことといたしたいのです。それが樂果を生み出すのです。それが樂果を生み出すのです」

D 「なぜお念仏が真の善因なのですか」

D 「お念仏にはアミダ仏のすべての善と功德がこもっているからです。聖人は『この行(念仏)は、すなわちこれらもろの善法を撰し、もろもろの徳本を具せり』と仰せられています。

念仏に比べて、凡夫の側からなす善因(善根)は、貪欲・瞋恚・愚痴の煩惱がまじつていましてから善因であつても性質の劣つた小善です。そのような善根(善因)では真実の安樂はもたらさないのだといわれています」

J 「いつまでたつても私が幸せになれないのは、まことの善がないからなのですか」

D 「そうかもしれません。真実の善因をいただけば、その因にふさわしい真実の樂が与えられるのでしよう。

そしてついには究極の樂すなわち極樂へと私を導き入れてくださいます。それはこの世の身が滅び、仏国に生まれた時と仰せられています」

J 「なぜお念仏という善をいただけば、この世から安樂がもたらされるのですか」

D 「念仏は仏の智慧を本質としているからです。ですからお念仏をいただいて称える人には仏の智慧が私の内面に働いてくださいます。それは(今の状況である病氣や貧困や困つた人間関係などを、どう受け取り、どう理解し、どう意味づけるのか)というところに働いてくださいます。」

J 「お念仏の智慧はどのような智慧ですか」

D 「転悪成善の智慧とか転悪成徳の智慧と申しまして、悪を転じて善と為し徳と為してくださる智慧です。この智慧が働いてくださつて私に樂果がもたらされるのです」

J 「転悪の悪とは何ですか」

D 「倫理的宗教的な悪という意味もあり、また聖人が(大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風靜かに衆禍の波転ず)といわれる衆禍すなわちもろもろの禍(わざわい)のことでもあります」

J 「そうすると、(私たちが本当の幸せを得ることができないのは真の善因がないからであり、真の善因をいただけばそこに真の樂が与えられる。そのまこと善因とは仏から与えられるものであり、具体的にはお念仏である。そのお念仏をいただいて称える人は念仏にこもっている仏の智慧が働いてくださる。その智慧は災禍を転じて善(よきこと)に為し、悪をも徳に為してくださる転悪成徳の智慧である。この智慧が現在の私の内面に働いて、そこに真の安樂が与えられてくる。真の安樂がもたらされないのは、悪しき因や人間的小善しかないからである)と、このようにわけですね」

D 「ええそうです」 (了)

と仰せられています。

真宗聖典講座

「念仏もうしそうらえども、踊躍ゆやく歡喜のころおろそかにそうろうころのそうらわぬは、いかにとそうべきことにてそうろうやらん」と、もうしいれてそうらいしかば、「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり。」

〈歎異抄第九章の一節〉

（現代語訳）「念佛を申していますが、喜びの心は薄く、天におどり地におどるほどの喜びが湧いてまいりませんし、また急いで浄土へまいりたいと思う心が起こつてこないのはどういふわけでしょうか」とおたずね申しあげたところ、聖人は、「親鸞もそれをいぶかしく思っていたが、唯円房、そなたも同じ心であつたか」

〈歎異抄第九章第二講〉

唯円房が問題としているのは、かつて初めてお念仏のお心が我が身に届いて、躍り上がるほどに喜こんだあの感激がいつの間にか薄れてしまい、へあの時のような喜びが今は湧いてきませんが、これはどうしたことでしょうか」と、親鸞聖人にお尋ねになつて居るのです。その問いに対する聖人のお言葉がこの第九章の内容となつています。

さて、前回少し歡喜について述べました。今回、この歡喜についてももう少し述

べたいと思います。と申しますのは、この歡喜ということとは人生にとつて極めて大事な意味をもっているからです。

この歡喜の原語は梵語のプラサーダという言葉だそうです。プラサーダは淨信とか信樂とか信心歡喜とかに翻訳されますから、この歡喜は信心歡喜と同じ内容です。

プラサーダの意味は「澄みきつて淨らかとなり静かな喜びや満足の感ぜられる心」（藤田宏達説）といわれています。

「澄みきつて淨らかとなり静かな喜びや満足の感ぜられる心」とは、なんとまあ素晴らしい心ではないでしょうか。私たちが心から願い求めているものは、このような心であり、このような心持ちで生活ができることではないでしょうか。こういう言葉に接すると、「どういふ心境になりたいのか分からなかつたけど、ああ私はこういう心がほしいのだなあ」とあらためて気づかされます。

私たちの生活は物質的に豊かで大変便利になりましたが、何かが大事な点で欠けています。それは日常生活におけるプラサーダの心ではないでしょうか。

人との競争で勝つたときの喜びは、人に「人に負けまい」とする我執のにがりがあります。

憎い人が不幸になつてほくそ笑む心は淨らかな喜びとは裏腹です。

大もうけしたときや物事が都合よくいったときの喜びは、心がうきうきして静けさがありません。

新築の家を建てて住みはじめた時や新車に乗った時の喜びはしばらくしか続きません。美しい音楽を聞いているときとか大自

然の神秘に感動するという喜びはプラサーダに似ていますが、こうした芸術や自然の神秘にふれる喜びは、人生全体・いのち全体の喜びとはなりません。

信心歡喜（プラサーダ）の歡喜について親鸞聖人は

「身に喜ぶを歡といふ。心に喜ぶを喜といふ」（和讃の左訓）

と記しておられます。身も心も喜ぶのを歡喜という言葉われています。

心が喜ぶというのは経験的にわかりますが「身に喜ぶ」というのは、何を言おうとされているのでしょうか。それはいのち全体が歡ぶという、非常に深い喜びを表し、人生全体を「ありがたし」と感じて生きていることではないでしょうか。

いのち全体が静かで淨らかな歡びに潤うるおされている、そういう人には人生に対する深い満足感が当然ともなつてきます。その（満足）というものが今日非常に大事だと思ひます。

さて、政治の世界にも経済界にも医療の世界にも宗教界にも、日本で深刻な問題になつて居るのは、言うまでもなく個人々人の倫理意識の低下です。いわゆる社会倫理とか企業倫理といつても、個人の倫理感情がもたなくなつています。

この倫理感を高めるものは何でしょうか。それは「人生の深い満足感」だと思います。それを明らかに指摘されたのが、大谷派の先覚者・清沢満之師です。師の言葉に

「なにもか善なるや、なにもか悪なるや。他なし、吾人をして絶対を忘れざらしむるもの、これ善なり。吾人をして

絶対に背かしむるもの、これ悪なり。しめて絶対は吾人に満足を与え、反対は吾人に不満を与う。ゆえに満足を生ずるものは善なり。不満を生ずるものは悪なり。

満足あれば無欲心あり、無欲心あれば不動心あり。不動心あれば膽勇あり。膽勇あれば無畏心あり。無畏心あれば精進あり。精進あれば克己あり。克己あれば忍辱あり。忍辱あれば不爭心あり。不爭心あれば和合心あり。和合心あれば社交心あり。社交心あれば同情心あり。同情心あれば慈悲心あり。大慈悲心はこれ仏心なり」とあります。

ここで清沢師は、満足心から欲望がコントロールされ、努力しようと励む心が起こり、苦しみに耐える力を得、人のかかわりが平和となり、他者の苦しみにたいする共感ややさしさがおのずと起こつてくると言われています。

こうして、人生に対する深い満足感と喜びから自発的で高い倫理性が生まれるのです。

その歡喜満足は「絶対は吾人に満足を与え、反対は吾人に不満を与える」といわれるごとく、如來の大慈悲心（絶対）にふれて与えられ、逆に如來にであわなから人生に不満が生まれてくると、清沢師は言われるのです。

現代人の「キレル」「うつとうしい」「むかつく」などの言葉から響いてくるのは己の人生に対する「やりきれなさ」「よろこびのなさ」「むなしさ」「欠乏感」です。今日の犯罪の多発はこれと無関係ではないと思ひます。（了）

信仰夜話

〈その一〉

赤羽根というところに半蔵という同行がいました。真宗の教えを聞いているうちにあるとまどいがおこり、直吉という厚信の同行を訪ね、相談しました。

「蓮如上人のお文に〈我が身は悪いいたずら者であると思いつめて〉とあるけれど、私はどうしてもそのように悪い者とは思いつめられません、どうしたものでしょうか。お聞かせ下さい」

「我が身は悪いいたずら者と思え」との善知識の仰せは、そう思いつめることのできない者に、そうせよというのではないのであろう。むしろ自分は悪い者と思いつめないような、へこんな愚かな私をお助けくださいます」と、信じてはいけないだろうか」と答えられたのでした。

〈悪いいたずらもの〉ととりつめて思えない、どうしたものであろうかと半蔵は苦になったのです。彼は聞法に真剣であり、自分をごまかすことができなかったのだと思います。

「汝、極重悪人よ」といわれますが、実感としてなかなか自分を極重悪人とは思えません。それどころか、〈そこそこましな人間〉とさえ思うのが私の日常意識。しかし、「極重悪人が汝の本当の姿なのだ」といわれる諸仏・善知識の仰せが本当なのであって、〈私はましな人間〉という思いは驕慢の煩惱。

仏の言葉は正しいモノサシであれば、極重悪人であるのがまことの私の姿。〈極重悪人の私〉と思えても思えなくても〈極重悪人〉が私の本当の姿。

極重悪人と少しは思えても、そんな思はずどこかえ飛んでしまい、またどれほど悪人と思えても諸仏方が「極重悪人よ」と申されるほど思えないのが愚鈍の私の現実。

どうかしてそう思わねばならぬと思うのも計らいであり、〈極重悪人と思えば救われる〉というのはなおさら計らいでありましょう。

半蔵さんに〈とりつめて悪人と思えない、こんなおそまつな私を〉と、いただけよとの直吉同行の言葉であります。思えぬままに助けていただく外なく、「己の悪をも自覚できぬそんなお前を」と仰せられる大悲を仰ぐばかりであります。

〈その二〉

福井県に昔、吉郎右衛門きちろうゑもんという信心の厚いお方がいました。彼が重い病気になりましたので、ある友の同行がお見舞いに行きました。病に伏ふしていた吉郎右衛門が見舞いに来たその同行さんに

「病が重くなって、いよいよ私も臨終間近になったようだ。今までたくさん聞いた仏法は今はなくなってしまう、念仏はちっとも出なくなりました。もうもうさっぱりしたものだ。さあこんな私はどうなるか、お前さんひとこと言ってみてください」と尋ねられました。

吉郎右衛門は臨終がせまり、しかも生涯一筋に聞法を心がけてきた厚信の念仏者です。下手な答えはできません。尋ねられた同行は、とても困ってしまい、「何

とも言うことができませぬ。むしろあなたのお心を聞かせてください」と申しましたら、吉郎右衛門は一言「助けてもらえばかりじゃ」と答えられたのでした。

「助けてもらえばかりじゃ」という一言はずっしりと重い言葉ですね。信心といっても「助けてもらえばかり」といただいている外はないからです。私の方はまるでダメ、まるでダメな私は阿弥陀様が「まるまる助ける」との仰せに「助けてもらえばかり」であります。私の方は空っぽ。阿弥陀様がすべてであります。それで大満足なのであります。

〈その三〉

江戸時代、江州（滋賀県）に嘉右衛門かえもんという門徒がいました。彼は、ある時期から、死んでいく未来に悩み、仏法を聞くようになりました。死んで地獄に落ちはしないかという、いわゆる後生が問題となったのです。それで、越後（新潟県）におられた名師の香樹院師にお会いしてお聞かせをいただこうと思いい立ち、暑い真夏にもかかわらず旅立ちました。昔の旅ですから大変です。やつのことで越後の師の寺に着きすぐに、汗をふきふき師に面会しましたら、師は

「そなたは体の踏み出しはできたが、まだまだ心の踏み出しができておらぬ。まあ台所の方へ行って、腹の支度たくでもしただがよい」と。

後生の一大事で遠方はるばる尋ねてきたその尊い志をほめてくださり、ねぎらいの一言でもあるかと思いきや、この一言です。嘉右衛門さんは身のおきどころ

がなく、まだ法を求める心の浅いことに驚き、はなはだ恥じ入ったと、後年、人に語られたのでした。

ここで、香樹院師が「まだ心の踏み出しができておらぬ」と言われたのはどういう意味でしょうか。

それは察するに、「つきつめて聞く態度」ではないでしょうか。いろいろな仏法の話の漠然と聞くのではなくて、「この所がどうしても明らかにならぬ」「この一点が晴れぬ」というような、切迫した問題意識をもって聞く、そういう姿勢が嘉右衛門さんは弱かったのでしょうか。それで「台所でメシでも食うて出直でなおしてこい」というような師の厳しい言葉となったのではないのでしょうか。（了）